

介護のオノマトペの分類からみるその機能と背景 —介護職員と外国人介護従事者への調査から—

神村 初美

1. はじめに

2019年4月施行の特定技能枠介護の受け入れ枠は、5年間6万人でN4程度が入国の要件である。ここから、N4程度の初級レベルで介護業務を行う外国人介護従事者が増えると予想される。現場ではこの介護業務を円滑に行う際、オノマトペを多用する傾向がある(村山2018、細馬2017、神村・野村2017)。すると、N4程度の初級レベルの外国人介護従事者であっても、ある程度のオノマトペを知っていないと十分に業務ができないと言え、早急なオノマトペ教育への支援が望まれる。初級レベルでの介護のオノマトペ教育を行うには、介護現場、および外国人介護従事者の介護のオノマトペの実態について把握する必要がある。実態をとらえることで、習得すべきオノマトペや有効な促し方について探れるからである。

しかし、これまで日本語教育では、介護現場のオノマトペの使用実態はもとより、外国人介護従事者の介護のオノマトペの理解状況についても、詳細な研究は行われてこなかった。なお、介護のオノマトペとは介護現場での円滑なコミュニケーションを図るために、頻繁に使用されるオノマトペ群を指すこととする。

2. 先行研究

2.1. 言語学分野におけるオノマトペ

母語話者にとってオノマトペは、発音の響きが意味に直結していて感覚的に理解しやすく伝わりやすい。長い文章を使わなくても物事を簡単に言い表すことができる便利な言葉である。しかし、言語学では「重要な言語要素であるにもかかわらず日本語だけでなく他の言語においても、もっとも遅れている研究分野の一つ(田守・ローレンス1997)」と指摘されている。それは、子供じみた幼稚な言葉といったとらえ方、および感覚的で主観的な言葉であるため、とらえどころがなく研究しにくかったからであろう(田守・ローレンス1997、窪園2019他)と述べられている。NINJAL(2016)では、理論言語学と言語類型学における過去の研究から、日本語のオノマトペは次の(a)～(e)のような典型的特徴を持つとまとめている。

- (a) 音韻論：他の語類と基本的に同じ音素体系を用いるが、その用い方は頻度や音素配列の面で一般語としばしば異なる(例：和語で許されない単独[p]音がオノマトペでは「ピカピカ」のように頻繁に用いられる)。
- (b) 形態論：完全重複や部分重複を含む例が多く、それらは通常反復・継続・強調といった意味と類像的に結びつく事象を表す(例：キラキラ キラッ キラン キラーン)。

- (c) 統語論： 副詞用法(例：キラキラと光る)が最も一般的。特に「する」や「いう」を意味する動詞と述語を形成する例が多い(例：「キラキラする」、「ゴトゴトいう」)。
- (d) 意味論： 音象徴(構成音声・音素と概念の間の類像的關係)が体系をなす(例：「ゴロゴロ」における有声阻害音による重さの音象徴(Hamano 1998)など)。
- (e) 語用論： 砕けた会話、対子ども発話、詩的文章に多く現れる。オノマトペの使用は、会話への関与の強さ(Nuckolls 1996)、感情の強さ(Baba 2003)、認識的権威(Dingemanse 2011)と相関する。

NINJAL(2016:4-6)を参考に筆者がまとめたもの

2.2. 福祉・医療分野におけるオノマトペ

福祉・医療分野でオノマトペは、福祉・医療従事者同士や従事者と被介護者・患者との間の意思の確認などによく使われ重要な役割を担っている。

福祉分野において例えば村山(2018)は、認知症高齢者と高齢者ケア専門職の双方の認知症スティグマ¹に着目した文献のレビューから、オノマトペを認知症ケアとアセスメント²に使用する際の有効性に着目し、そのオノマトペ使用を介護の声かけへの提言としてまとめている。また、細馬(2017)は介護現場でのカンファレンス³の発話と動作連鎖の分析から、オノマトペとそれに随伴する動作は介護を受ける人(以下、被介護者)および介護をする人(以下、介護者)の行動や様子を具体的に表現する役割を果たしていて、介護現場での円滑なコミュニケーションに役に立つと示した。

医療分野においてファイザー(株)(2013)は、47都道府県の8,183名を対象とした大規模なインターネット調査から、医師が問診時に疼痛の尺度として痛みのおノマトペを駆使する言語活動について(f)(g)のようにまとめ、疼痛を伴う疾患の症状を確認したり病理を判断したりする際、オノマトペは重要な役割を担うと示した。

(f) 炎症や刺激による痛みを抱えているときは、高い割合で「ズキズキ」「ガンガン」を使用する。

(g) 神経による痛みを抱えているときは、電気刺激を思わせる感覚「ジンジン」「ビリビリ」「ピリピリ」や、針で刺されるような感覚の「チクチク」を多く使用する。

2.3. 日本語教育学分野におけるオノマトペ

留学生を対象とした日本語教育において三上(2007)⁴は、各種言語資料と日本語の教

¹ スティグマは福祉の用語で「汚名」の烙印を押されてしまうこと。この場合、認知症を患ったことによって差別的に見られてしまうことを指す。

² 被介護者の課題分析をする為に行われる評価や査定のこと。

³ 医療や福祉の現場で、よりよいサービスを提供するためにスタッフ等の関係者が、情報の共有や共通理解を図ったり、問題の解決を検討したりするために開く会議のこと。

⁴ 各種言語資料は新聞記事等8点、日本語の教科書は初級14種21冊、中級10種13冊から出現する

科書に出現するオノマトペ調査への考察から、特に初級の段階においては、多くの教科書やカリキュラムが文型・文法シラバスを軸として構築されているため、学習者が必要とする語彙の教育に目が向けられることが少なかったと示した。特にオノマトペについてはその使用頻度や重要性に見合うだけの十分な学習や指導がなされているとは言い難い状況にあるとした。そのため、多くの学習者が中級や上級の段階になって急に、新聞やテレビ、周囲の日本人の会話等を通して数多くのオノマトペに遭遇することとなり、戸惑うとした。また、指導する教師側も初級から中級前期においてほとんど体系的に扱われてこなかったオノマトペを、中級後期以降にどのように指導していったらいいかわからず、かつ、指導しようと試みても適切な教材や有効な指導方法が見当たらない現実があるとした。こういった背景から、円滑なコミュニケーションに不可欠なオノマトペを学習する機会も手段も乏しいのが、日本語教育業界の現状であると指摘している。

上述の三上(2007)を踏襲する知見が、渡邊(1997)、ツィガルニツカ(2007)、獅々見(2016)などでも述べられている。渡邊(1997)は、日本語の教科書に見られるオノマトペの分析から「オノマトペを指導する上での指針がない」ことが脈絡のないオノマトペ教育を招いていると指摘した。ツィガルニツカ(2007)は、オノマトペ教育へのビリーフ調査から、日本語学習者は「日本人との理解やコミュニケーション」を重視するが、日本語教師は「オノマトペの使用頻度の高さ」を重視しているとその齟齬を明らかにした。また、獅々見(2016)は、より実践的なオノマトペの習得を目指し、会話コーパスからオノマトペを抽出し、全 252 語彙を日本語の会話におけるオノマトペの基本語彙として提示している。

福祉・医療従事者のための日本語教育において、上野(2013)は日本人および外国人介護従事者に、後藤(2015)は日本人および外国人看護従事者に対し行った調査から、外国人介護・看護従事者のコミュニケーション上の「オノマトペの不理解(上野 2013:14、後藤 2015:48)」をそれぞれ指摘している。神村・野村(2016)⁵は、これら外国人介護従事者のオノマトペの不理解に対し、EPA 介護福祉士候補者(以下、EPA 候補者)を対象とした授業で図った結果から、介護場面に適した違和感や不快感のないオノマトペの作例を促す留意点を示している。また、三橋他(2017)、加藤他(2020)のように介護の日本語教育のテキストでオノマトペを扱う例も見られる。

しかし、上野(2013)や後藤(2015)で見られた「オノマトペの不理解」は、調査から偶発的に得られた結果であるため、「不理解」の詳細は示されていない。また、神村・野村(2016)の授業実践で取り上げたオノマトペは、担当教師がいわゆる教育的な配慮に基づき介護場면을想定し抽出したオノマトペである。そのため、介護現場での実際のオノマトペ使用を担保していない可能性がある。さらに、現時点で見られる介護の

オノマトペの数と種類を調査し日本語教育のための基本オノマトペとして 70 語彙を選定している。
⁵ 3 つの留意点として、(1)場面の文脈や背景とともに必要条件を合わせ明確に提示する、(2)正用と誤用の両例文を示しその相違点を具体的に示す、(3)上記の(1)と(2)を輻輳的にオノマトペ指導に取り入れる、を示している。

日本語教育のテキストには、外国人介護従事者がすぐに必要となるオノマトペや、そのオノマトペが使われる背景や機能については示されていない。

増加が見込まれ特定技能や技能実習枠では着任後すぐ介護業務にあたる。そのため、すぐ必要となるオノマトペを取り上げ、そこにどのような背景や機能があるのかを添えて教育を促すことが、実際のオノマトペ使用に導くためには重要となる。しかし、外国人介護従事者に教授する必要があるオノマトペ、およびそのオノマトペが使用される背景や機能について探った研究は、管見の限りみられない。

3. 研究課題

本研究では、日本人および外国人介護従事者への調査を基に、介護現場の実際のオノマトペ使用についてその分類を試みる。分類したデータを量的・質的に分析することによって、介護現場で頻出するオノマトペ、外国人介護従事者に教える必要があるオノマトペにつき明らかにする。そして、頻出する介護のオノマトペが使用される背景や機能について探る。

4. 研究方法

本研究では、半構造化インタビュー形式のヒアリング調査を行い、得られたデータのコード化分類から量的・質的に分析し、介護のオノマトペが使用される背景や機能について考察した。上述の研究動機から、介護のオノマトペの体系的や形態的特徴に注目するのではなく、介護現場での実際のオノマトペ使用の把握から外国人介護従事者に教授する必要があるオノマトペ、およびその背景や機能について探るためである。

まず、ヒアリング調査の「ヒアリング項目」を以下に示す。

Q1：どういう場面で、どういうオノマトペをよく使用しますか？(以下、Q1)

Q2：介護現場で意味が分からないオノマトペはありましたか？

それはどういう場面でしたか？(以下、Q2)

Q1は調査対象者全員に、Q2はEPA候補者及びEPA介護士に対し行った。

次に、ヒアリング調査の手順を示す。

- (1) 調査の2～3週間ほど前：「ヒアリング項目」をメールで調査施設に送り、介護現場でのオノマトペ使用につき意識化を促す。
- (2) 調査の当日：日本人は個別に、外国人介護従事者はグループインタビューの後に個別インタビューを一律、加える。
- (3) 調査の後日：調査後、想起したオノマトペ使用があった場合は、メールで知らせてもらう。

上記の(1)～(3)は、データの信頼性を高めるためにオノマトペの特徴を考慮して行った工夫である。(1)は、母語話者である日本人介護従事者の場合はオノマトペがあまりにも日常と一体化しすぎていて意識化しにくいと思われたところから、意識化を促すためである。(2)は、非母語話者である外国人介護従事者の場合はオノマトペ特有の「意味」と「形式(音声)」の直接的なつながりを感じるのは難しいと思われたところ

から、分からなかった語の使用場面を想起させ、できるだけ詳しく語ることを促すためである。(3)は、より多くのデータを収集するためである。

「ヒアリング項目」で得られたデータを文字化し、目視でオノマトペを抽出した。一人の調査対象者が語る中で、同じオノマトペが何度も出現する場合も1回と数えた。抽出したオノマトペを以下の(4)(5)の手順でコード化し、タグ付けを行った。

(4) 使用場面や使用用途で小分類のタグをつける。

(5) (4)の小分類が使用された場面や文脈から上位分類のタグをつける。

調査期間は2015年度～2019年度で、各介護施設で行った。調査の時間は各人1時間～2時間程度で、総計141時間である。調査対象施設は全25施設、調査協力者は合計85名である。日本人介護従事者は合計35名で、主にEPA候補者の教育担当者である。外国人介護従事者は合計50名で、EPA候補者が45名、EPA介護士が5名である。調査協力者の概要を表1に示す。

表1 調査協力者の概要

	職種	来日年	2015	2016	2018	2019	小計		合計
日本人介護従事者	介護士		18	12	1	4	35	35	35
外国人介護従事者	EPA候補者	1年目	8	4	0	0	12	45	50
		2年目	13	2	0	0	15		
		3年目	11	2	2	0	15		
		4年目	0	3	0	0	3		
	EPA介護士	5年目	0	3	0	0	3	5	
		6年目	0	1	1	0	2		
調査協力者数			50	27	4	4	85	85	85

5. 調査結果の概要

オノマトペの提示にあたり、「『オノマトペ度』や『語彙化』の程度はさまざまである(三上 2007:52)」ため、実証データに即した形態で、動詞を修飾する場合の助詞「と」はオノマトペ内に含めずに提示する。また、オノマトペだけでは状況がわかりにくい場合、()内に発話者の発話を、[]内にその文脈を適宜付し、文字化データの個人名は符号化し示すこととした。

このあとの6.～9.で、本調査の結果について詳しく見ていく。

6. 介護現場でよく使用されるオノマトペの全容

Q1に対する回答の分析から、「介護現場でよく使用されるオノマトペ」として、全112語彙が抽出された。次のページに「表2 Q1介護現場でよく使用されるオノマトペの一覧」で示す。まず、全112語彙のうち、大幅な重なりは見られなかった。

表2 「Q1 介護現場でよく使用されるオノマトペの一覧」

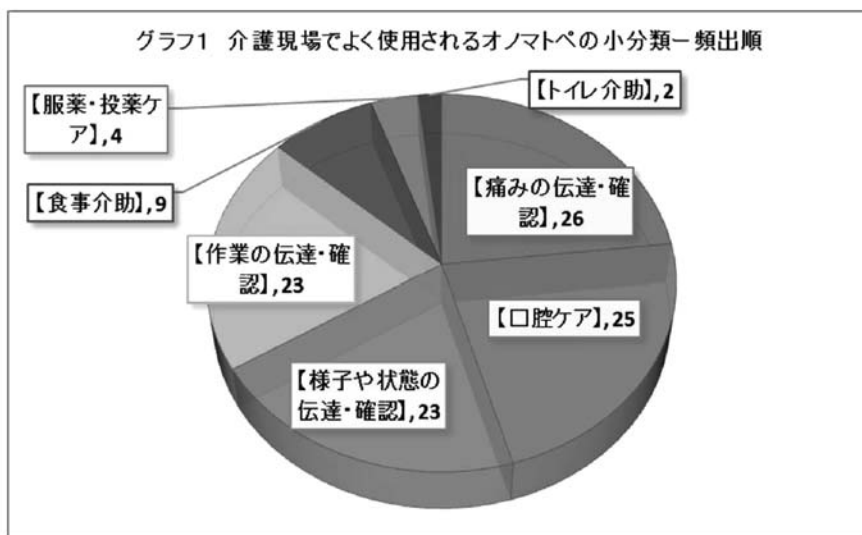
小分類	施設No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	小計	
〔痛みの伝達・確認〕	1 チクチク		1		1							1		利用者さん	利用者さん												3	
	2 スキズキ		1		1							1		はときどき	はときどき										1		4	
	3 ズーン			1																					1		2	
	4 ズンズン																								1		1	
	5 ビリビリ					1																			1		2	
	6 ヒリヒリ					1																					1	
	7 ジンジン																								1		1	
	8 シクシク					1			1																		2	
	9 ガンガン					1							1														2	
	10 (足が)バンパン								1																		1	
	11 (足が)ガクガク																								1		1	
	12 (おなかが)ゴロゴロ																								1		1	
	13 (心臓が)パフラパフラ※																								1		1	
	14 (心臓が)バクバク																								1		1	
	15 ゲホゲホ(している)																								1		1	
	16 (のどが)ごろごろ																								1		2	
17 ブクブクペー		1														1	1	1					1	1	1	7		
18 クチュクチュペー		1	1								1	1	1			1	1							1	1	9		
19 ガラガラペー											1	1	1			1								1	1	6		
20 ゴロゴロ(できますか)				1																						1		
21 (歯が)グラグラ																								1		1		
22 (入れ歯が)ガチガチ																		1								1		
23 メチャクチャ					1																					1		
24 バタバタ(する)							1										1									2		
25 ウツカリ																							1			1		
26 ドン(と尻もち)																								1		1		
27 ガミガミ								1																		1		
28 プンブン								1																		1		
29 プー(とおならが出た)																								1		1		
30 チョコチョコ(歩く)										1																1		
31 ペタペタ(歩く)																		1								1		
32 (足元が)グラグラ																								1		1		
33 ソワソワ										1																1		
34 ボーツ(と)																								1		1		
35 ボサボサ																									1	1		
36 グッズリ														1												1		
37 スヤスヤ														1												1		
38 トロトロ(してる)								1																		1		
39 ウトウト(してた)								1																		1		
40 (目が)パチパチ(してる)																				1						1		
41 (手を)ニギニギ(する)																				1						1		
42 パラパラ(ふりかけ)																									1	1		
43 シュワシュワ(コーラ)																									1	1		
44 キンキン(冷えた)																									1	1		
45 伝達作業の	チャチャツ(とやっちゃって)					1	1												1	1	1			1	1	7		
46 サッサ(と)						1	1												1		1					5		
47 サー(と)						1	1												1	1	1					7		
48 ザっ(と)							1																		1	2		
49 バツ(と出して)																								1	1	2		
50 (助食事介)	ゴックン(してください)																									2		
51	モグモグ(してください)																							1		3		
52	ペー(してください)																								1	1		
53	(よだれ)タラタラ																								1	1		
54	ダラダラ(垂れる)																							1		1		
55	ベロベロ(垂れる)		1																							1		
56	【服薬・投薬ケア】	ゴックン(してください)	1																					1		2		
57		ゴロゴロ(してください)		1															1							2		
58	【トイレ介助】	ジャー(してください)																							1	1		
59		ジャツ(と流して)																							1	1		
※東北方言			4	6		12	4	4	1	3	2	2	5			5	2	15	2	2	3			1	7	26	4	112

次に、もっとも多く見られたのは、「クチュクチュペー」で9回答、「チャチャッ(とやちゃって)」、「サーッ(と)」が同じく7回答、「ズキズキ」が4回答の順であった。

「クチュクチュペー」は、口腔ケアで認知症を患う被介護者のうがいを促すのに有効と示された。また、「チャチャッ(とやちゃって)」「サーッ(と)」は、介護者同士が速やかに業務をすすめたいときで、言いたいことがすぐに伝わるから便利と示された。「ズキズキ」は、被介護者からの痛みの訴えでよく聞かれると示された。

7. 介護現場でよく使用されるオノマトペの小分類とその考察

抽出された全 112 語彙のオノマトペを、語られたときの使用場面や使用目的に注目して小分類にカテゴリー化した。小分類の結果は表 2 内で示した。また、頻出順に整理し「グラフ 1 介護現場でよく使用されるオノマトペの小分類—頻出順」で示す。



頻出順で最も多かったのは、【痛みの伝達・確認】の26回答である。これは、被介護者からの痛みの訴えやそれらを看護師に伝える際に使うオノマトペである(ズキズキ、チクチク、ズーン、ピリピリなど)。次に多かったのは【口腔ケア】の25回答である。これは食事の後、口の中を清潔に保つために行うケアで使うオノマトペである(クチュクチュペー、ゴロゴロ(できますか)など)。そして【様子や状態の伝達・確認】と【作業の伝達・確認】が同じく23回答で続いた。【様子や状態の伝達・確認】は、被介護者や介護者自身の様子や状態を伝えたり確認したりするために使うオノマトペである(バタバタする、チョコチョコ歩く、トロトロしてるなど)。【作業の伝達・確認】は、介護業務の内容を伝えたり確認したりする際に使うオノマトペである(チャチ

ヤッ(とやっちゃって)、パツ(とだして))。以降、【食事介助】として、咀嚼や飲み込みを促すために使うオノマトペ(モグモグ、ゴクン、ペーなど)で9回答、【服薬・投薬ケア】として、服薬を促す際に使うオノマトペ(ゴクン(してください)など)で4回答、【トイレ介助】として、トイレでの排泄の介助をする際に使うオノマトペ(ジャー(してください)など)で2回答の順であった。

さらに小分類を考察した結果、次のことが分かった。

まず、【痛みの伝達・確認】では、ファイザー(株)(2013)で示された疼痛を伴う疾患の症状とそれを表すオノマトペ(f)(g)との相関性が見られた。

次に【口腔ケア】では、全体の4割弱を「クチュクチュペー」が占めるなど特定のオノマトペが主に使われていることが分かった。【食事介助】、【服薬・投薬ケア】、【トイレ介助】も特定のオノマトペが使われていた。ここから【口腔ケア】、【食事介助】、【服薬・投薬ケア】、【トイレ介助】での外国人介護従事者によるオノマトペ使用を考えた場合、各小分類内で見られた高頻出のオノマトペが使えれば、ある程度の対応は可能であろうということが窺われた。

そして、【作業の伝達・確認】は、限られた時間の中で効率的な処理を求めるオノマトペが多く見られた。これらのオノマトペはその特性から慌ただしい現場で瞬時に交わされると予想された。よって、外国人介護従事者が【作業の伝達・確認】を「不理解」である場合、何らかのミスコミュニケーションが起こる可能性が危惧された。

一方、【様子や状態の伝達・確認】は、性格、歩き方、うたた寝の様子などオノマトペが多岐にわたることが分かった。そのため、例えば担当している被介護者にまつわる【様子や状態の伝達・確認】から、外国人介護従事者ごとにあわせ教授していくことが望ましいと考えられた。

8. 介護現場でよく使用されるオノマトペの上位分類

小分類は、想定される介護の場面や動作によって使うオノマトペ(以下「場面・動作依存」)と、行為の目的によって使うオノマトペ(以下「使用用途依存」)に、さらに上位分類された。次のページに「表3 介護のオノマトペの分類」で示す。

8.1. 場面・動作依存のオノマトペ

「場面・動作依存」は、介護のある特定の場面や想定される動きに関する共有の情報を頼りにして、介護者が被介護者に対し発話するオノマトペである。被介護者が自分の力で出来なくなったことや出来にくくなっていることを、被介護者自身の力でできるように促すために、介護者側から被介護者に向けて使われていた。具体的には、小分類の【口腔ケア】【服薬・投薬ケア】【トイレ介助】【食事介助】が該当した。

表3 介護のオノマトペの分類

使用場面や使用目的		具体例	
場面・動作依存	【口腔ケア】	25	ゴロゴロ（できる？）/ガラガラ/ブクブクペー/グジュグジュペー/クチュクチュペー（してください）
	【服薬・投薬ケア】	4	40 （目を）パチパチ（してください）[目薬をさした後]/ゴクン（してください）[薬の飲みこみを促す時] ジャー（してください）[トイレの水を流すのを促す時] ペー（してください）[口から出してほしい時]/ゴクン（してください）/モグモグ（してください）
	【トイレ介助】	2	
	【食事介助】	9	
使用使徒依存	【痛みの伝達・確認】	26	
	【様子や状態の伝達・確認】	23	72 ウトウト/トロトロ/グッスリ/スヤスヤ/ソワソワ/モゾモゾ/（入れ歯が）ガチガチ（しますか） サッ（とやって）/サーッ（と掃いといて）/サッサ/サッ（と拭いておいて）/チャチャッ（とやっちゃって）
	【作業の伝達・確認】	23	
合計		112	

以下に【食事介助】の文字化データから一事例を抜粋し「場面・動作依存」について詳しく見ていく。

口にたまっているときはあまりあの一よくない。で、ペーしてくださいって、[先輩の介護士が]言ってたから・・・、食事介助の時に口の中のものをペーしてくださいのは・・・、あの一例えば、口にたまっているときは誤嚥？良くない、だから、ペーしてくださいって、大きい声で言うと、認知症がある要介護4レベルのひと・・・だけど動いてくれるから。(12IFN)

上記の12IFNは来日3年目のEPA候補者である。認知症を患っている要介護度4の利用者の食事介助の際、利用者の咀嚼や嚥下の機能が低下気味であることを念頭に介助していた。そのため、口の中に食べ物がそのまま残されている状況に誤嚥性肺炎の危険性を察知した。この危険を回避するには「ペー」が効果的だと先輩から聞いていたので、被介護者自身の吐き出す力を使って出してくれるように、大きい声で「ペーしてください」と「ペー」を使った。認知症があつて要介護度が高いとすぐに反応できないが、「ペー」を使うと反応してくれるから使うと述べている。

つまりこの場合、嚥下機能が低下気味の被介護者の食べ物が口の中にたまっただまま

という状態から誤嚥性肺炎を疑うという場面で、「口の中のものを出す」動作に瞬時に向かわせる、介護のオノマトペ「ペー」の即効性の情報を頼りにして、介護者側から被介護者側に向けて使われたオノマトペであるといえる。

「場面・動作依存」においては、上述の「ペー」のように、オノマトペの音が、体をもつ性質と共起し動作が自然に促されるというオノマトペの特長と体感との関連が見られた。ここから「場面・動作依存」においては、オノマトペの特徴が持つ効用から、認知機能の低下で言語の理解やとっさの反応が難しくなった被介護者にも、容易に動作を促せるという便宜さを介護の行為に機能化させていることが窺われた。

8.2. 使用使途依存のオノマトペ

「使用使途依存」は、発話者が聞き手に伝えたい、達成したい目的を頼りにして発話されるオノマトペである。発話者の訴えや考えといった主観に基づき発話され、介護者と被介護者の双方向間・介護者間などで使われていた。小分類の【痛みの伝達・確認】、【様子や状態の伝達・確認】【作業の指示】が該当した。以下に【痛みの伝達・確認】の文字化データから一事例を抜粋し「使用使途依存」について詳しく見ていく。

ん・・利用者からの痛みの訴え？腰が痛いときとか・・例えばどう痛いの？ずきずきする？とか聞くこともありますし、・・きりきり痛いとか、ずーんと重く痛いとか、なんかうまく言えないけど、痛いって気持ちを伝えてくれるときにこちら側もなんとなくわかりますからねー。気持ちが分かってあげられるっていうのかな？それは大事だと思うんですね。あと、介護士は、直接痛み止めなんかの処置はしないっていうか、できないので、その時に看護師さんにどう痛いのかを伝えるときにも有効だと思いますね・・。(16FJU)

上記の 16FJU は経験豊富な日本人介護士である。Q1 に対し、例えば被介護者が腰が痛いときなど、その不快な気持ちや状態を訴えたり、反対に介護者がその状態を確認したりする際、「ずきずき」や「ずーん」などを用いる。このオノマトペ使用は、被介護者の気持ちを理解する上でもとても大事であるとしている。また、看護師に被介護者の痛みの状態を伝え、その対応に向かわせる意図を含むにも有効であると述べている。

つまりこの場合、痛みという主観に基づき、それを聞き手に伝える、聞き手が理解する・受容するという目的を頼りにして発話されたオノマトペであるといえる。また、介護者が医療従事者に対し被介護者の状態を伝えるとともに、それに応じた医療処置への促しを含意する「暗黙知」を頼りにして発話されたオノマトペであるといえる。

「使用使途依存」においては、上述の痛みのオノマトペのように、発話者の訴えや気持ちを聞き手に伝える、また伝達された情報を理解したうえで反応する・適切な対応を促すという「暗黙知」を、介護現場におけるコミュニケーションスキルとして機能化させていることが窺われた。

9. 外国人介護従事者がわからないオノマトペ

Q2 に対する回答の分析からは以下のことが分かった。まず、Q2 では、Q1 における上位分類の「場面・動作依存」は見られず、「使用用途依存」のみが見られた。次に、語られたときの使用場面や使用目的に注目して小分類にカテゴリー化した結果、【利用者からの訴え】【状況の伝達】【作業の指示】が得られた。Q2 の結果を「表4 外国人介護従事者がわからないオノマトペ」で示す。

表4 外国人介護従事者がわからないオノマトペ

	オノマトペ使用 の主な方向性	使用場面 使用目的	具体例
使用用途 依存	被介護者 ⇒介護者	【利用者からの 訴え】	ジンジン/チクチク/チクッ(とする)/スー スー(する)/[痰が]ガラガラ(する)/(のど が)ゴロゴロ(してる)/ベロベロ(しちや う)[口からこぼれ出る]
	介護者間	【状況の伝達】	バラバラ/グチャグチャ/ゴチャゴチャ
		【作業の指示】	ササッ(とやって)/サーッ(と方付けて)/ ザッ(と書いて)

Q2 の【利用者からの訴え】は、被介護者が自身の痛みや状況などを介護者に伝える際に使うオノマトペである。【状況の伝達】は介護業務全般に係る状況や様子などを伝える際に使うオノマトペで、【作業の指示】は速やかに介護業務を進める際に使うオノマトペである。【状況の伝達】と【作業の指示】は主に介護者間で使われていた。

まず、【利用者からの訴え】は、Q1 の小分類【痛みの伝達・確認】で挙げられていた、いわゆる「痛みのオノマトペ」との顕著な重なりが見られた。この【痛みの伝達・確認】は、Q1 の全抽出語彙の中で最も多く見られたオノマトペの小分類群でもある。

つまり、本調査全体で最も多く見られた【痛みの伝達・確認】のオノマトペにおいて、外国人介護従事者の場合は【利用者からの訴え】の「痛みのオノマトペ」が最も「分からない」と示されたのである。ここから、外国人介護従事者の「痛みのオノマトペ」の「不理解」という実態が本研究によって具体的に示されたといえよう。「痛みのオノマトペ」は、Q1、Q2 の両結果の中で頻出と示されたところからも、外国人介護従事者の「痛みのオノマトペ」をめぐる困惑が懸念され、「痛みのオノマトペ」こそが、すぐに外国人介護従事者に教授すべきオノマトペであるということが分かった。

次に、【状況の伝達】と【作業の指示】は、Q1 の小分類【作業の伝達・確認】で挙げられていたオノマトペとの重なりが見られた。【作業の伝達・確認】は、Q1 の考察時に「不理解」である場合、何らかのミスコミュニケーションが起こる可能性が危惧されていたが、Q2 の結果は、Q1 の考察で示唆された危惧が現実のものであることを示す実証データの一つとなったと言えよう。

10. まとめと今後の課題

本研究では、日本人および外国人介護従事者へのヒアリング調査を基に、介護現場での実際のオノマトペ使用の把握からその分類を試み、データを量的、質的に分析することによって、介護現場で頻出する、また外国人介護従事者に教授する必要があるオノマトペにつき明らかにした。また、介護のオノマトペが使用される背景や機能について探った。

その結果、次のことが分かった。

1. 「介護現場でよく使用されるオノマトペ」として全 112 語彙が抽出され、7つの小分類の【痛みの伝達・確認】、【口腔ケア】、【様子や状態の伝達・確認】、【作業の伝達・確認】、【様子や状態の伝達・確認】、【作業の伝達・確認】、【食事介助】、【服薬・投薬ケア】、【トイレ介助】と2つの大分類の「場面・動作依存」、「使用用途依存」で詳細に提示された。
2. 【口腔ケア】、【食事介助】、【服薬・投薬ケア】、【トイレ介助】は、これらの内の高頻度の語彙が使えれば、ある程度の対応は可能であろうと考えられた。
3. 【作業の伝達・確認】は、外国人介護従事者の「不理解」が現実のものであることを示す実証データから、何らかのミスコミュニケーションが起こる可能性が危惧され、支援の必要性があることが分かった。
4. 【様子や状態の伝達・確認】は、オノマトペが多岐にわたるため、例えば外国人介護従事者が担当している被介護者にまつわる【様子や状態の伝達・確認】のオノマトペから、外国人介護従事者ごとにあわせ教授していくことが望ましいと考えられた。
5. 「場面・動作依存」においては、オノマトペの特徴が持つ効用から、認知機能の低下で言語の理解やとっさの反応が難しくなった被介護者にも、容易に動作を促せるという便宜さを介護の行為に機能化させていることが窺われた。
6. 「使用用途依存」においては、発話者のニーズや気持ちを聞き手に伝える、また伝達された情報を理解したうえで反応を示したり、適切な対応を求めたりするという「暗黙知」を介護現場におけるコミュニケーションスキルとして機能化させていることが窺われた。
7. 外国人介護従事者の【痛みの伝達・確認】の「痛みのオノマトペ」の「不理解」という実態が示された。「痛みのオノマトペ」は、介護現場で頻出するにもかかわらず、外国人介護従事者から「わからない」とされたため、喫急な支援の必要性が示された。

上述の研究成果から、まず、本研究の一つ目の課題である「外国人介護従事者に教える必要があるオノマトペ」を表 2～表 4 で具体的に示した。次に、外国人介護従事者にすぐにでも教授すべきオノマトペとして、【痛みの伝達・確認】の「痛みのオノマトペ」と【作業の伝達・確認】のオノマトペがあげられた。

そして、本研究の二つ目の課題である「介護のオノマトペが多用される背景」とし

では、介護者が被介護者の動作を促す意図があり、その際は「便宜さ」という機能が内包され、「身体」との密接な関連があることが考察された。また、介護のオノマトペに内包される「暗黙知」を介護現場におけるコミュニケーションスキルとして機能化させていることも合わせ考察された。

外国人介護従事者に対し、介護のオノマトペをやみくもに教えても有効な方法とは言えない。介護現場で実際にどのようなオノマトペが使われているのか、どのような場面でどのような機能があるから当該のオノマトペを使用するのか、といった「介護のオノマトペ教育の指針」が明確になっていなければ、場当たりの教育に陥ってしまうからである。外国人介護従事者がいきいきと介護現場に参画することを射程に入れた「持続可能な介護のオノマトペ教育」は望めないからである。

本研究は、介護のオノマトペの実態の一端を具体的に明らかにするものであり、外国人介護従事者に対する「介護のオノマトペ教育の指針」、およびその先に見据える「持続可能な介護のオノマトペ教育」に大いに資するものと考えられる。

一方、特定技能などによる介護従事者の場合、着任後すぐに現場での介護業務にあたるため時間的余裕がないことが予想される。このような時間的制約がある中で、介護のオノマトペをどの時期にどのような形で取り入れていったらいいのかについては、就労する介護現場や介護の専門家との連携を図りながら進めることが必要であり議論の余地がある。よって、介護現場や介護の専門家と図る「介護のオノマトペの語彙シラバス」の構築を今後の課題としたい。そして、外国人介護従事者がいきいきと介護現場に参画する「持続可能な介護のオノマトペ教育」について追及していきたい。

参考文献

- 上野美香(2013)「介護施設におけるインドネシア人候補者の日本語をめぐる諸問題—日本人介護職員からの視点からの分析と課題提起—」『日本語教育』156号, pp.1-15
- 加藤美知代・桑原禎子・小林秀樹・黒木葉子(2020)『外国人のためのやさしい介護—実践日本語コミュニケーション—』ask
- 神村初美・野村愛(2016)「介護のオノマトペの作例分析から明らかになる指導上の課題—EPA 候補者向け対面型集合研修における3年間の作例誤用を中心に—」『第18回専門日本語教育学会研究討論会誌』, pp.12-13
- 神村初美(2019)「第3章オノマトペを上手に使う」, pp.42-63 遠藤織枝・三枝令子・神村初美『介護のことばづかい—利用者の思いにこたえる—』大修館書店
- 窪菌晴夫(2019)『よくわかる言語学』ミネルヴァ書房
- 後藤典子(2015)「医療・介護現場の方言を外国人はどう理解するか—他地域出身日本人と比較して—」『日本語教育』161号, pp.42-49
- 獅々見真由香(2016)「日本語の会話におけるオノマトペの基本語彙選定—『BTS』によ

- る多言語話し言葉コーパス』と『BTSJによる日本語話し言葉コーパス』を用いて
—『日本語教育』165号, pp.73-88
- 篠原和子・宇野良子(編)(2013)「オノマトペ研究の射程—近づく音と意味—」ひつじ
書房
- 田丸育啓・ローレンス・スコウラップ(1997)『オノマトペ—形態と意味—』くろしお
出版
- ツイガルニツカヤ・レナ(2007)「日本語オノマトペに対するビリーフ—日本語教師と
学習者の比較—」『筑波応用言語学研究』第14巻, pp.129-137
- ファイザー株式会社(2013)『47都道府県比較：長く続く痛みに関する実態調査2013』
- 細馬宏道(2017)「介護活動を表現するオノマトペ」『人間知能学全研究会資料』, pp.25-
28
- 三上京子(2007)『日本語オノマトペとその教育』早稲田大学大学院日本語教育研究科
博士論文
- 三橋麻子・丸山真貴子・堀内貴子・西巳加子(2017)『介護の日本語—基本のことば—』
スリーエーネットワーク
- 村山明彦(2018)「エビデンスとナラティブの関係—認知症高齢者と高齢者ケア専門職
の認知症スティグマに着目した検討—」『最新社会福祉学研究』第13号, pp.29-35
- 渡邊裕子(1997)「日本語教育におけるオノマトペの扱いについての—考察」『学校教育
学研究』第9巻, pp.23-31
- Baba Junko (2003) Pragmatic function of Japanese mimetics in the spoken discourse of varying
emotive intensity levels. *Journal of Pragmatics*, 35: 1861–1889.
- Dingemans Mark. (2011) The meaning and use of idiophones in Siwu. Ph.D. dissertation, Max
Planck Institute for Psycholinguistics, Nijmegen and Radboud University.
- Hamano Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford, CA: CSLI
Publications.
- National Institute for Japanese Language and Linguistics (2016) NINJAL INTERNATIONAL
SYMPOSIUM 2016 -MIMETICS IN JAPANESE AND OTHER LANGUAGES OF THE
WORLD-, pp.1-10.
- Nuckolls Janis B (1996) *Sounds Like Life: Sound-Symbolic Grammar, Performance, and
Cognition in Pastaza Quechua*. Oxford: Oxford University Press.

付記

本研究は、科学研究費 基盤研究(C)17K02857「いきいきとした介護のオノマトペ使
用のための学習映像教材の開発に関する研究」(研究代表者:神村初美)の成果の一部
分である。

(かみむら はつみ・ハノイ工業大学外国語学部日本語学科)